真・恋姫†無双＜遼来来。外史へ＞

泰然自若

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双＜遼来来。外史へ＞

【Ｎコード】
Ｎ９７４８Ｍ

【作者名】
泰然自若

【あらすじ】
コーエーキャラ設定の張遼はゲームの中で延々と止まったままの世界で生活していた。プレイヤーに飽きられ、一行に世界が進む気配がない毎日。群雄割拠の中、エディット武将大量陣営で資金も兵糧も赤字。戦争をしかけねば餓えてしまう極限の状況下の中で必死に戦った過去を思い出し、バッドエンディングではなく、グッドエンディングを迎えたかったと無念を胸に抱いた時。張遼は光に包まれ、気が付くとそこは、荒涼とした大地がただ広がっているだけであった。＊＊＊＊＊＊若干加筆修正有り。

（前書き）

原作で遊んだ事ないのですが、他者様の作品を読みまして、なんというか。書きたくなって、勢いで書きまして。ご覧のように未完にて力尽きました。

でも書いていて結構楽しかったです。

一応プレイ動画見たのですが、長すぎて断念。ノベルゲームはこんなに長い作品になるのですね。予想以上のボリュームでした。

力尽きましたが、元気があって、設定とか完結までの道筋が見えてきたら長編にするかもしれません。

張遼はコーエーの三国志？を基盤としてその上に三国無双を乗せている感じです。キャラの性格。口調、ゲーム設定云々も適当です。深く考えずに。突っ込まずに。

誤字脱字。表現の不備があるかもしれません。悪しからずご了承ください。

一万五千字くらい追加。

何時ものように、だらだらと過ごす日々。もう、あの頃には戻れないのだろうか。

我らの主が我らを操る事が無くなって久しく時が流れたであろうが、我らの時は止まったままである。

「おぉ。張遼殿。我が君がお呼びだそうだ。何でも全員を集めてらしい」

「珍しいものですな。管夷吾殿」

管夷吾殿は元々、この時代設定の人間ではない。もっと過去に生きた人である。だが、我らの主が古の名をエディット武将として登録したことによって作られた一人だ。

私は、管夷吾殿と共に、我が君の元へと急いだ。

着いてみると主要な将が揃っていた。空いている席に座ると我が君が現れて、玉座に座られた。

「今回、皆を集めたのは他でもない。我らの現状の事だ」

辺りは水をうったように静まり返った。

本来であれば、騒ぎ立てる者が多いのがここの将達のはずであったが、此度の議題。それほど重きものである事は皆が承知している事であった。

「我らの主がこの世界を動かす事が無くなって久しい。厳しい事かも知れぬ。主は飽きたのではないだろうか」

その言葉を聞いた瞬間に管夷吾殿が机に右手を振り下ろし、重く地響きにも聞こえる音が鳴った。

本来、管夷吾殿は武将ではない。文官であり、優秀な政治家である。その管夷吾殿がここまで怒りを露わにする事は珍しい事であった。

「元はといえば自業自得ではないか！　縛りプレイがしたい等と申して、初心者モードのエディット武将大量陣営でしかクリアしていない主がいきなり、上級者の＜イフ＞シナリオで始めるなどと…！　しかも、エディット武将を起用している時点で大した縛りでもないだろうに……！！」

「こちらはいにしえ武将にエディット武将が居るにしても、主は戦略性を理解しておらなんだ……1武将1万程度の軍を大量投入すればいいものを……」

「言うな！　もう、何も言うな」

管夷吾殿の言葉を皮切りに各々の不満が漏れていく。確かに、我らの主は戦い方をまったく知らなかった。

「静まれ。主の事は良い。事実を受け止めなければならない」

「我々はこれからどうすれば良いのだろうか」

「主は常々言っておった。三国無双。恋姫無双。これらの名を言っておっただろう」

「もしや。それは……」

「うむ。推察ではあるが、それらをやりこんでいるために我らの時は止まったままなのだろう」

「聞いた事があります。三国無双は、張遼殿と言ったような武将が一騎当千となり、雑兵を叩き斬り、諸葛亮がびーむなる怪しい光で持って敵を蹴散らすと。」

「びーむなる怪しい光……なんと奇怪な……」

「ですが、それらに満足したのなら」

「望みはまだある。各々、腐らずに過ごして欲しい」

「はっ！」

我が君は、人格者である。

我らの主が真剣に能力を考えたらしいのだが、その苦労の甲斐あってか民を思い、部下を慕ってくださる。

私は元々、呂布殿の陣営であったが、初心者モードの時に登用され、甚く気に入られ、上級ＩＦシナリオでは序盤から大量の将が登用に来られ、確か５２人目程度で私は折れた。

降って見ると、５０名を超える将を抱えているために財政は赤字

で都市を占領していかなければ自壊するほどの危うさを持つ陣営であった。

今となっては良き思い出である。あの頃は兎に角、必死で戦った。でなければ給金は出ない上に、兵糧赤字で餓えてしまうからであったのだが。

それでも、血が滾り、我が武を存分に奮う事ができた。

あの頃のような興奮を得られないのだろうか。完結もバッドエンディングしか経験していない。

もし良き、終わりを向かえられてからなら。

悔いは無かっただろう。

我らの主。

……私は

私は———

その呟きとともに、私は光に包まれた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ここは何処だ？」

視界が眩い光に遮られ、下馬する際に感じる僅かな浮遊感を、此度は無性に長く感じ取っていた。

暫くして光が消えて視界がはっきりとしてくると、今まで室内に居たはずの私は広大な大地に足を付け、手には我らの主が関羽殿から没収して授けてくれた青龍偃月刀を握っていた。

関羽殿には本当に申し訳ない事をしたと思うのだが、今となってはもうどうする事もできまい。

空は青く、雲は白く流れては形を変えていくその様に私は驚いた。動いているのだ。止まっていたはずの世界が。今再び動き出している。

この事実が不覚にも私の涙を誘った。

これが夢であったとしても構わず、この一時の流れをしかと胸に刻みつけよう。

瞼を閉じた。ゆっくりと全てを噛み締めながら。そして世界の終わりを見る。はずであった。

「これは……真の事なのか」

世界は変わらず、流れては姿を変えていく。

本当に動いている。だが、その事を知ると私の中には感動よりも、不可思議な思いが溢れてきていた。

一体、何が起こっているのか。我が身に一体何が。

膝を折り、大地を手で触れると小さく肉を刺す砂利の心地良さもあり、土の匂いも感じられる。何より、風が私の頬を撫でる。

これが、事実であるとするならば、この世界は一体何なのだろうか。

少なくとも、私の存在していた三国志？という世界（ゲーム）ではない。

何より、操られている感覚がないのである。元の世界では我らの主が文字通り我らの行動を決定していた。それに逆らう事はできない。

時が動いている限り、我らはその通りに行動していたのである。だが、今はどうか。世界が動いていながらも私を縛るものは何もない。

これを不可思議と呼ばずしてなんと言えば良いのだろうか。

混乱する私ではあったが、遠くより砂塵を撒き散らしながらこちらに迫ってくるものを捉える。

我が身を揺らすその砂塵の煙からして数十の騎馬は居るであろうと考えつつも、万事に対処する必要があった。

相手の風体には見覚えがある。

黄色い布を纏う一団を一つ。知っている。

残党の可能性をまず捨てる。反乱を捨てる。時期が違いすぎる。元の世界（ゲーム）では群雄割拠が設定になっていたために上級者モードでは乱はなかった。

ならば、ここは新しいシナリオなのだろうか。新しく我らの主が……。だが、このような単騎で軍勢と当たる事などありはしない。

そのような設定はないのだ。

だとするならば、ここはやはり別の世界（ゲーム）と考えるのが適当であろう。

身体は動く。我が武を奮うには何ら不満はない。確かめる意味合いを込めて、私は賊と対峙した。

「なんだぁ？　てめぇは」

騎馬隊の先頭に居た男が私を見下ろす。

奇異の色が強い。多少の警戒はしているようだが、数の利からか、何処か抜けている気配であった。

「お前達に聞きたい事がある。お前達は黄巾党で相違ないか」

「あぁ？　てめぇ。何言ってんだ？」

「アニキ。こいつかなりいい物持ってやすぜ」

「おい。その得物と身ぐるみ寄こすならよ、俺は慈悲深いんだ。命だけは盗らないでやるぜ？」

その言葉と共に、下種な笑い声が響き渡る。

やはり、私の知る者達ではなかった。

私の知る彼らは賊の役割を果たす律儀な者達ばかりであったからだ。このような見も心も腐りきった輩ではなかった。

故に、ここが別世界である事を理解する決意ができたようなものだ。

「この長刀。軍神より貰い受けた物故に、お前達のような畜生よりも下種な輩に握らせるわけにはいくまい」

「なんだとこらぁ！」

「ほざきやがったな！こちとら騎馬２０に歩兵１００も居るんだぜ。てめぇに何ができんだよ！」

正確に数を把握しているという事は、末端の賊ではないという事だろう。それなりの将の配下。これは、人数から見ても先遣の意味合いが強いようだ。

騎馬の機動力を生かした斥候と突撃隊を有し後続の歩兵が蹂躙、あわよくばこの人数で制圧。

いや、小さい村であるならば容易だろう。

私はその事を察するとこの下種を見逃す理由もなくなった。

恐らく近くに襲うべき場所があるのだろう。

「安心するがいい。お前達に握らせる事は許せずとも、切れ味を堪能する事は吝かではない。この刃。我が武を持ってお前達に示そうぞ」

別の世界なれど、賊の跋扈を許すほどこの張文遠。人の道を知らぬわけではない。

「クソ野郎が！　ぶっ殺せ！！」

騎馬が勇むように駆けてくる。だが、既に我が刃の間合いなりて、その騎乗の攻撃は遅い上に、間合いを見誤ったもの。

賊の一撃避ける事など造作もない。槍の一突きは首目掛けて伸びてくるが首を横に落とす事で避ける。

その動作とともに、私は腕の一部と化した刃を振るう。

視界に見える3騎の馬を叩き斬った。今の私には青龍偃月刀により、武力が向上されているのも相まってか、何時もよりも軽妙な動きが出来た。

馬を切り伏せる事ができるほどの向上には眼を見張るものがある。それに他にも思う所はあったが、まずは事態を収めねばならない。

相手は馬を一気に斬り伏せた事に恐怖したようだ。足が止まり、顔が引き攣った者となった。

構わずに私は踏み込む。

地に伏せた賊の頭を刎ね飛ばし、動きの止まった騎乗の賊を突き刺した。

「く、くそ！　囲め！　数では勝ってる！　囲んで殺せ！」

下策とはまさにこの事を言う。

複数が一人を相手取る場合において、四方を囲む事は有効な手段と思われる。

が、それは熟練する者同士で行う連携である。

下手な者が、まともな訓練を行っていない者達が行ってもそれは互いを活かせない。

隙と動きの鈍さを誘発させ、（誰かがやるのではないか。）（誰かの後に続けば良いのではないか。）などといった考えを生み付ける。

まして、烏合の衆。

加えるならば、得物は長物である槍。囲みには扱いにくくそれに付随した腕が必要になる。

「な、なんだコイツは！」

このような囲みなど、あって無い様なもの。

私は槍ごと賊を叩き斬る。

この戦場を駆ける上で、私はある疑問を頭に持っていた。それが慢心に繋がる事もなく、賊の大半を殺したのだが――

「て、撤退だ！」

生き延びた騎馬３。歩兵２０名ほどを取り逃がしてしまった。

騎馬を先に殺しきれなかったのがまだまだ私の武が未熟な所であった。

如何に歩兵の後ろに行こうとも、殺す事は可能であったはずだ。

反省を感じつつも、私は躯を眺める。

驚く事に彼らは血を噴出し、息絶えているのである。なんとも、面妖なものであった。

私の世界（ゲーム）では彼らは討たれると悲鳴を挙げて倒れ込み、消えてしまう。

その時に血を流す事もない。しかし、消えてしまってもまた徴兵したのなら何食わぬ顔で存在しているのだ。

将であったとしてもそうだ。

斬首すれば物語からは退場するが、時が止まれば普通に存在している。その上、我らの主に文句を言うのだ。

「能力が中途半端だから。使う用途がないからって理由だけで斬首されるのは辛い」

等と申す者も居たくらいである。

この躯から察するにこの世界ではこれが普通なのだろう。加えて、我が武も予想以上に強い設定となっているやもしれぬ。

馬を3頭も斬り伏せたのだ。普段であればまず出来ぬ芸当。

もしや……。

これは我らの主が言っていた世界創造（アップデート）なるものではないだろうか。

いやいや、しかしこの世界は確かピーエスツーというものでそれは出来なかったと誰かが言っていたな。

そうなるとこれは……。

新作なのだろうか。記録（セーブデータ）を反映させる事ができる世界（ゲーム）もあると聞く。ならば、新作に古い私が存在できるのではないだろうか。

むむむ。可能性としては在り得る。だが、随分と思い切った事をする所であるな。

これほどの戦場（いくさば）を我らの主のような少年に見せて良いのだろうか。

まさか、これが我らの主の言っていた年齢規制が入るという世界(ゲーム)なのだろうか。

もしや、それではないだろうか。

近年の創造主達(ゲーム会社全般)は、さらなる高みを目指し、あやゆる試みを行っているとも聞く。

美男美女ばかりを創造する事もあれば、女子ばかりが存在する世界(ゲーム)に男が少数だけしか居らぬ地もあると聞く。

しかし、管夷吾殿は何故それを知っていたのか。

我らの主がまた喋っていたのだろうが、聊か不憫ではあるな。

我らに語りかけても返す方法を知らぬ身。

出来る事ならば、一度で良い。話してみたかったものだな。

む。そういえばつい先ほど、我が君の元での話し合いで、三国無双なる世界(ゲーム)が挙がっておったな。

一騎当千の如き雑兵を叩き斬るか。

うむ。

ここはその三国無双かもしれぬな。話の程度からも私が馬を斬り伏せた事も納得できる。

しかし、何時までも悩んでいてはどうにもならぬか。

どういった経緯で私がここに居るかは判らぬが。いずれ見えてこよう。

まずはこの地にて、私がするべき事を見つけぬ事にはどうすることもできまい。今、私は誰からの縛りなく動かねばならないようだからな。

その事を自覚した瞬間から身体中に滾るものが溢れて返って来る。

忘れていたあの日の滾りに似たものであるが、違いはすぐに判る。

私は今、己で考え、己で行動できる事に、喜びと感動を覚えているのだ。

「ふっ。当に忘れたと思っていたが。我が武を示す事がここでは叶うやもしれぬな」

最も、ここには我が君、煉獄（笑）殿が居らぬ故に、何処かに仕官せねばならぬようだ。

煉獄（笑）殿は我らの主が中二病なる不治の病の余波によってその名になったと本人が涙を流しながら語ってくれた。

我が君も不憫であったな。

この場を後にしつつ、賊の動きから見て近くに村でもあると踏んでいる私は行く当てもなく彷徨う事にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

荒涼した大地が続いていた。

本来、本物の張遼であるのならば、ここが何処であるかは判ったやもしれない。

しかし、残念な事に私は作られた張遼に過ぎず、知識も与えられたものしか有していない。

その事で地理の把握に難儀している。

元の世界（ゲーム）では、地理などかなり大まかなものであったので仕方ないの無い事だと思うようにはしているが、これはどうにも進む方角を間違えたか。

そんな不安が過ぎった。

ここが三国志を題材にしているのはあの賊を見て理解はした。だが、果たして今、どの時代なのかははっきりしていない。

乱が起こっているのか。起こる前なのか。はたまたまったく別の、それこそ＜イフ＞と呼べる設定なのだろうか。

未だ、知己にとは言わぬが、民にすら出会えておらん。

三国志の歴史は多少知っている。

それが設定として必要だったからであるが、それも何処まで通じるか判らぬ。

正史と演義が存在するそうだが、私の知がどちらのものかまでは判らぬ。

それらを考慮するのならば、やはり、この眼で確かめるしかあるまい。

歩けど歩けど、未だ見えず。日は昇り傾き始めていた。

最悪は野宿を覚悟せねばならない事を考えていたのだが、彼方より戦場(いくさば)の風が流れてくるのを感じ取った。

空腹ではあるが、動けぬわけではない。弱者が賊徒に襲われているという事も考えられる故に、私は駆けた。

未だ、衰えを知らぬ我が身体に感謝しつつも、駆ける事によって生じる身体に溜まる疲労感から呼吸を整える必要性。

それらが余計に私を滾らせ、活を見出していた。

驚く光景であった。

この地に足をつけたであろう時から私は果たして何度、このよう

に驚いただろうか。

集団での戦闘だと思い込んでいた事もあるだろうが、黄巾賊徒を蹂躙するかのようにその集団を切り裂く一人の女子。

なんという武だろうか。

私は暫し見惚れてしまったが、決して後悔はしておらぬ。

武に美しさを感じた事などなかった故に、その光景はまるで新しい。その地平の彼方に見える空の淡い青さのような髪が揺れながら、その身純白を纏いながらも、赤に染まらず。

戦場（いくさば）を踊る演舞の如き、立ち振る舞い。その腕に握り、腕の一部となった得物の軌道はまさに縦横無尽か。

だが、そう何時までも眺めているわけにはいかない。

多勢に無勢は明白。賊はそれなりの軍勢のようだ。

遠目に見て、弓持ちが数十。女子も弓を嫌って自ら飛び込んだか。少なくとも、猪ではないようだ。

これは、我が武を持って弓の脅威を取り去る事が先決。

そう思い行動しようとしたのだが、私を見つめる視線を感じ取った。

幸いと賊ではないようだ。敵意も殺意もない。

気にはなるが、今は目の前の女子を助けようぞ。

私は地を駆けた。

間合いを詰めていくと賊徒もこちらに気が付く。騎馬が気付き私に駆けて来きて言い放つ。

「てめぇ何者だ！」

「生憎と、お前達に明かす名など持ち合わせていないだ」

「なんだと……！」

「急ぐのでな……押し通る！！」

「こいやぁ！！」

迫る騎乗の槍は二つ。その揃った刃の軌道に感心しつつ、賊でなければ良い兵になったであろう二人を槍ごと叩き斬った。

惜しい。筋が良いだけに。そう思えた。

だが、それも一瞬の事。一瞥もせずに他の騎乗の者を落とし、あるいは突き殺し、斬り殺した。

時を稼がれてはならぬ事を承知している。

此方を目掛け矢をまさに今射ろうとする弓兵を捉える。そんな物に恐れる張文遠ではない。まして、間合いはこちらに分がある。

このような中途半端な間合いでは活かし切れないのが弓である。射られる弓を時には避け、時には得物で落とす。

目の前に迫った私を見て弓が逃げ惑い、歩兵が前に出てくる。思い通りになったようだ。

これで女子もさらに動きやすくなったであろう。そう思いつつ、目の前に迫る雑兵達に我が武の体現である刃が応えた。

「邪魔だ！」

横薙ぎにより、数名を斬り飛ばし、弓兵に肉薄する。

活のある者は短剣を抜き去り襲い掛かってくる者も居たが、無駄な足掻きであった。

難なく首を刎ね飛ばし、あるいは斬り殺した。我らの武を見せ付けた事により、賊徒は完全に戦意を失いつつある。

「く、くそ！　な、仲間か！」

ここは、一つ。

「官軍の先遣にて馳せ参上した！　賊徒共よこのまま我が武の糧となるか！」

官軍などではないが、賊徒を混乱させるには十分すぎる嘘であった。

「か、官軍が迫っているのか！」

「ま、拙いぞ。」

「うろたえるな！単騎駆けできた奴の話を――」

混乱を収めようとする者の首を刎ね飛ばす。このような混乱時、軍を立て直すのは指揮官の役目。

賊徒としてはそれなりの統率力があったようだが、戦場で敵を目の前にしておきながら視線を外し注意を怠るなど愚の骨頂。

だが、それによって賊徒は蜘蛛の子を散らすように逃げ去ったのは好都合であった。辺りに静寂が舞い降りていく。

此度の戦いにて、私の武は確実に高みへと一歩上り詰めた。そんな気がしていた。賊徒の討伐での武勇など蛮勇である。されど、それもまた然り。

武の高みを登るには必要な事。

「そこの御仁。一応は礼を申そう。助けていただき感謝する」

先ほど思う存分に武を披露していた女子が私に向け言い放った。

「だが、貴公が割って入らずとも、私だけで十分あの賊徒を討つ事が出来た。」

なんと、自信に溢れた物言いだろうか。

私は少々毒気を抜かれてしまったようだ。

女子という事で、何処か侍女や町の庶人の女子を思い描いていたのだろう。

「確かにそうであったと見受けられたが、弓兵が居ては少々窮屈そうに見えたのでな。余計な手出しを申し訳ない」

ここで、言い争いをしても無益なだけである。それに、今は他に知りたい事がある。

「ほぅ……いや。確かにその通りだ。それに貴公の武も中々のものであった」

「賛辞痛み入る。これも何かの縁。幾つか知りたい事があるのだが、答えてはもらえぬものか」

「ふむ。内容によるだろうが、私で答えられるのなら、答えよう」

「感謝する。では一つ、ここは――」

私はまず初めにここがどの地なのかを聞こうと口を開いたのだが。

「大丈夫ですか～？」

話の腰を折られてしまった。間延びした女子の声によって。

振り向けば、二人の女子が。

「風。この私が、あのような連中に遅れを取る事は無い。大丈夫だ」

「それもそうですねー」

「貴公もお怪我は……ないようですね」

「あ、あぁ。心配は無用だ」

見かけぬ衣服を纏う女子達だと思った。金色の髪色を持つ女子は至っては、頭に面妖な物体を乗せている。

「おかしいですね。ここは比較的賊の少ない土地なのですが」

「ほぅ。それではここはそれなりの政を行っているという事か」

民心が高いのだろう。それに黄布賊は冀州で立ち上がったと記憶している。

そう考えるとここは冀州から遠からず、近からず。という土地であろうか。

「正確に言えばここ陳留を治める曹孟徳という人物が。という事ですが」

なんと、ここは孟徳殿の居る陳留であったか。

特に喋る機会も会う機会もなかったのだが、その信望は初心者モードでも上級者モードでも世に轟くものであったな。

「噂をすれば……後は、その陳留の刺史様に任せるとしよう。すまない。約束を違える事になってしまうが。貴公は何処かの豪族であろう？共に居る所を見られると要らぬ詮索を受けてしまうのでな」

「官が絡むと余計な面倒ごとを抱え込みますからね」

「いや、気にする事は無い。貴公らには貴公らの事情があるというもの」

「それでは、」

「あぁ。達者にな」

聞きそびれてしまったが、地平の向こうより砂塵を散らす姿が見えてくる。

あれが、官軍だろう。それに、旗を見れば曹。

果たして、ここの孟徳殿は如何様な人物であろうな。

暫くすれば、私を囲むように取り並ぶ騎馬の牢が出来ていた。

私に非があるわけではないので、どうこうするつもりはない。やがて現れる3人の女子。

いや、まて。むむむ。嫌な予感が全身を駆け巡ってしまった。

「華琳様。こやつは……」

黒い髪は長く腰元にまで届く。

気高さの中に獰猛な虎を意識させる女子が口を開いていた。

「――どうやら、違うようね」

「はっ。こやつが、賊であるのならば探している連中は犬畜生以下の存在になってしまいます」

水に映る空の青さの如き髪色に違わぬ落ち着き払った抑制の効く声が私の耳へはいってくる。

どうやら、賊徒討伐。あるいは捜索のために軍馬を用いたようである。

共々、武人としては相当の腕前。その空気。未だ穏やかだが、触れる事に躊躇するほどに。

「貴公を陳留刺史であるとお見受けする。某……姓は張。名は遠。字は文遼と申す者」

いざ己の名を出す際には逡巡してしまった。

ここは私の居た地ではない。まったく新しい地。そして同じ三国志を題材している。

ならば、この地にはこの地の私がいるはずである。ならば、同名は拙いと判断した。

判断したは良いが、咄嗟に名など出てこない。仕方なく私は字の遠と遼を入れ替えたのである。

安易に私の息子の名や兄弟の名を騙っては後々、面倒になられては困まるので、思わず頭に過ぎった己の名を入れ替えてしまった。

名乗ってしまったからにはこの地では張文遼と名乗らなければいけないな。

抵抗は聊か残るが、致し方あるまい。この地の私に迷惑を被らせるわけにもいくまい。

「そう……私は陳留刺史の曹孟徳よ。張文遼。貴方はここで何をしているのかしら」

なんとも、難儀な質問を投げ掛けてきた。

先ほどの3人組みは官に関わりを持つのを嫌っていた。もしかするのならば、あの女子を追っているやもしれぬ。

しかし、正直に話すのも私の立つ瀬がないように思える。

「はっ。陳留へ向かう旅の途中。賊徒に襲われており、今しがた敵方を撤退させた所でした」

未だ、遠くはない位置に躯が無数に転がっている。証拠にはなるだろう。

「あれをたった一人で？」

今回は一人ではなかったが、可能であるかといわれればそれは

「はっ」

「……そう」

その時、騎乗していた金髪の女子が黒髪の女子に目配せをしたのを察知する。

突然であった。予期せぬ事と共に、ここで抵抗しても無駄ある事を静かに悟る。

今はただ、身を流れに委ねれば良い。と思っていたのだが。

「何故、貴公と刃を交えねばならぬのか。私に理由を教えていただきたいのだが」

私は目の前に佇む黒き長髪を靡かせながら、大刀を握り、殺気を放つ女子に。

ではなく、この発端を作り成した張本人。曹孟徳殿に顔を向けて問うた。

「それは、貴方の言葉に偽りが混じっていたからよ」

「偽りなど――」

「あら？　なら最初から聞くわ。貴方の名。生まれ。ここに来た目的。どうやってきたのか」

ふむ。困った事になった。流石は曹孟徳殿と言った所。

あの逡巡で全てが偽りになってしまったようだ。だが、正直に応えて私の首が繋がっていられるのか判らぬ。

新しい世界へ足を降ろして一日も経たずに生に幕を降ろしたくは無い。

「判り申した。全てをお話いたそう。しかし、一つ約束して欲しい」

「……何かしら。言ってみなさい。」

「これより我が口より零れる全ての言の葉。他言無用を願いたく」

「……是非もないわね。貴方の口上。その価値があるかどうか」

鋭さを極める。その眼光。だが、その内で揺れ動く微かな灯火は何処か弱弱しくも儚げなものに感じられた。

無意識の内に私は、手を翳し、そのゆらめきをじっくりと観察してしまいそうになり、腰を浮かせてしまった。

慌てて腰を落ち着けるが、今のは逃げようと企んだと見られてもおかしくはなかった。

言うほか、道は無い。

我が武を持ってしても、この武人達を相手取り逃げる事など無理なものよ。

「偽り無くお答え申します。姓は張。名は遼。字は文遠。雁門郡馬邑県にて生を受け。この地、陳留を踏む前は交州に居りました。ここに来た目的は私がこの世界に呼ばれた目的を探るためが一つ。もう一つはここが何処であるかを確かめるために。どうやってこの地に足をつけたかは私にも皆目検討もつきませぬ。ただ、言える事は

この世界とは別の世界。そこから光に誘われここに降り立ったという事」

私が何故、このような世界に来なければならなかったのか。

それは、私が最後に抱いた無念が形にした夢の世界なのかもしれない。

そうだとしても、私が夢に入る道理は無く。何故、私はここに存在しているのか。

それを知る必要が絶対にあるのだ。

私は曹孟徳殿を見据え、視線が絡み合う。

一歩も引く事は許されず、その一歩が我が命の終わりをも意味するものと同義である。

それほどの面持ちで私はこの視線という見えない刃の応酬を繰り広げた。

「張文遠。聞いた事があるわ。でも、確かその名を持つ者は女だったはずよ」

「はっ」

「それも、貴方のいう別の世界から来たという説明で一応は理解できる筋ね。この世界に二人の張文遠。貴方は言わば部外者で、それを心得、名を隠したと」

「咄嗟でありながらも一時凌ぎにこのような虚言を申しあげ申し訳ござらん」

「なぁ、秋蘭。一体、どういう事なんだ？」

「つまり、張文遠には同姓同名の御仁が居るという事を知って、華琳様に咄嗟の嘘をついてしまったという事だ」

「おぉ。そういうことか。つまり、張文遠！　貴様が悪いのだな！」

正しい。正しいのだが、何処か腑に落ちん。

「別の世界……俄かに信じられない話ね」

「はっ。それは重々承知」

「……証拠見せなさい。といっても、貴方の話からすればここと大差ない世界という事のようね」

「違いは曹孟徳殿を始めとする名のある将が皆、男という事が大きな差異ではないかと。しかし、今は私もこの地、全てを見たわけではなく」

聡い。聡明すぎるというのも難儀なものであるな。

状況が理解できすぎてしまえばそれはいずれ孤独を生み出す。

あの地で、我が君も孤独を味わっておられたのだろうか。だとするならば、なんと歯がゆい。

離れてこそ。我が武を捧げた者の苦労と痛みを知りたいと思える心理を得たという。

「つまり、貴方の居た別の世界にも私が居たという事ね？」

「はっ」

「面白いわね。話もそうだけれど、春蘭の一撃を避けるほどの技量」

その表情、未だ崩れず。己の優位を誇示しつつも私の話への興味を持つ。

それでいながら、真意を探るその瞳に曇りはない。

「か、華琳様。このような何処の馬の骨とも判らぬ男の戯言をお聞きになる事はありません！　すぐに華琳様への虚偽の口上で即刻首を刎ねましょう！」

「急ぐ事は無いわ。この男の評価をきちんとつける必要はある」

「で、ですが」

「姉者。私も華琳様の言うとおりだと思うぞ。それに、この男。首を刎ねるには惜しい人物だと思う」

「うぅ……秋蘭」

虚偽は重い罪ではある。

ここで首を刎ねよと言われてもおかしはなかったと覚悟していた

が、どうやらそうならずにすみそうだ。

最も、首を刎ねる事が確定したのならば、私は最後まで足掻いただろうが。

「ふふっ。秋蘭の言う通りではあるわ。だけれど……春蘭。この張文遠との一騎打ちの許可を出すわ」

「か、華琳様！」

曹操殿の言葉に唖然とするも、なんとか声を絞り出す。

「お、お待ちくだされ。何故、何故。そのような話になるのですか！」

話が逸れて行く。

何故、このような大事になってしまうのだ。

「私は興味があるの。その武勇。その胆力。そして聡明さもね。だからよ」

なんだというのだろうか。

「臣下を納得させるには、何より武将を納得させる一番良い方法は何かしらね？」

なんとも恐ろしいお人だ。

「春蘭、出来るわね？」

「はっ！　お任せください！！」

進むべき道は一本のみ。か。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

何時だったかしら。

「ぬぅ。貴公が曹操とはな」

あの人に出会ったのは。奇妙な名を持つ男。

男に興味なんて持った事がなかったのだけれど。

「真名とは、面白い文化が育った所だ。ぬ。我が名にそのような重みを持つ真の名は無いのだ。申し訳ない」

それでも、何処か惹きつけられる何かを持っていた。

「ここは誠に面白い世界だな。しかし、泣いておる。国とはな――人なのだよ。結局は人が居なければ国などは出来ん。そして、そこには流れがある。人が耕すから作物ができ、人が居るから、必要な物が生まれ、物が流れ、また必要な物が生まれていく。この流れこ

そが、国を作り、国の流れとなる。うむ。そうだな。国を人に例えるのならば。これは――」

――血。赤く流れるその血無くして人は生きられず、血を失えば人は死ぬ。人は血のように失ってはいけぬものなのだ。中々良い言葉だろう。私の土地では血が出る民など居らんのだがな。本来、人というものは血無くしては生きてゆけぬものよ。

――これは我らの主がこぼしておった言葉から私が勝手に汲み取ったのだがな。おぉ、我らの主は見た目に反して中々、頭の良いお人なのだが、その癖、戦がてんで駄目でのう。

あの人はそう言った。

初めは何を言っているのか。疑問をぶつけたけれど、天の話であると彼は言った。

誤魔化しているのは判っていた。

けれど、真意を知ったのは後になってから。

私も当初から信じるつもりはなかったけれど、面白さは本当だったのよ。

それに、あの言葉は今でも私の胸の内で光輝いているわ。

――もしかしたら、貴方の臣下もここにきているかもしれないわね。

何気なく投げかけた言葉。

あの人が軍を束ね、将を置く事を何処かで否定しつつも何処かで許容していた。

「そうであったのならば、探さねばならないな。いや、来ているだろうか。私の将はな。優秀な者らばかりで、私がただ、従っていただけなんだ」

そういって、笑っていた彼の臣下自慢を何度も聞いた。

「あの男は特にな。我らの主が気に行っておった。それも頷ける。私も同じく、あの男を気にいっておった。硬いのが珠に傷であったがな」

何度となく、聞いたおとぎ話のような、甘い。けれど面白い話の数々。

「この世界にも張遼は居るのだろう。出会う機会があるのならば従えると良い。ここの張遼も良い将であろう」

その言葉が何処か、遠くに向けられていて。何処か哀しそうで。

私は、何をしてあげられたかしら。

貴方が消えてしまうまでに。私は――

「泣いて、くれるのか。このような男に……。お主は本当に、良い器を持っておる。お主は……まさに曹孟徳よ……。名に恥じぬ。名の通り。大きな人よ」

違う。違うわ。貴方が居てくれたから。貴方と話したから。

私は私の思うべき道を知り、その道を歩む覚悟を決めた。

「春蘭と秋蘭は良い将だ。絶対にお主を支えてくれる。私の言葉では不安だろうが、な。」

「泣くでない。笑っておくれ。華琳――」

貴方がこの世から消え去ってどれくらいの歳月が流れていったのか。

数える事も無く、ただ貴方の言葉を胸に秘めて私は上を目指した。

遂に、なのかしら。

見つけたわ。貴方の臣下。

私はどうしたら良いのかしらね。

咄嗟の判断からここに同じ名前が居る事に気づき、名を偽り、かつその事を綺麗に包み隠した。

私でなければ気付けなかった。

春蘭、秋蘭はあの人と私の会話を知らない。あの人が何処から来たかも。いえ、彼は喋ったかもしれないわ。

けれども、あの二人はきっと信じなかったでしょうね。

だって、あの人は飄々としていて居て、どこか雲のように掴みどころがなかったから。

煙に巻かれたように何が嘘で何が本当なのかも、隠してしまう。そんな人だったから。

ふふっ。判るわ。この男を貴方が好いた訳を。

貴方とはまったく違うから。表裏と言ってもいいくらい。

だからでしょう。貴方はこの男を好いた。

この男もまた、貴方を好いていたかもしれないわね。

ねぇ――煉雷電。

ふふ。可笑しな名だわ。何度言ってみても。

――笑うでないわ。

私の耳に、かつての聞いた声が流れては、消えていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

上段より振り下ろされる凶刃を我が得物で受け止める。

必殺であったはずの一撃を受け止められて夏侯元譲殿の表情が変わる。

戦人であり、武人。その顔が全てを物語る。

そして、私にもまた喜びが湧き起こる。

目の前で無言のまま、間合いを開け、得物を構えなおす夏侯元譲殿の表情は明るい。

私を武人として認めてくれた証である。

語る事はせず、互いに一度打ち合うだけだ。それだけで力量を察し、歓喜する。

これを武人と言わずなんと呼べようか。

裂帛。その声と共に、素早く開いた間合いを詰めてくる。

間合いの差を把握しているからこそ。何より、己の腕を知っているからこその芸当。

咄嗟に刃で横なぎに振る仕草を入れると、夏侯惇殿が私の見せた僅かな挙動から防御の姿勢を取る。

その刹那の攻防となる読みあいに私は勝つ。

前に押し出る。夏侯元譲殿の顔が驚きに染まる。

柄で夏侯元譲殿の刃を受けながら肉薄しつつ、一気に身体を沈めながら、そのまま身体を右手に流す。

刃は左手に剃れ、僅かな隙間が夏侯元譲殿の身体に生じる。

その隙を夏侯元譲殿も理解し、逸れたままの刃を腕の力のみで横薙ぎに変えて打ちこんでくる。

これを読む。

私は流れに身を任せながら、石突で夏侯元譲殿の脇を強打したと共に、地に踏ん張り続けた足先を地に押し付け間合いを開ける。

「ぐっ！」

苦悶の表情を浮かべる夏侯元譲殿に間合いを詰める。

このまま首筋に刃を押しあてれば勝ちになる。そう判断したが、夏侯元譲殿は痛んだ脇を気にせずに一歩足を踏み込み袈裟がけに斬り掛かってくる。

その速さは怪我した者の持つ力ではなかった。

受け切る事は出来たが夏侯元譲殿が離れる事を嫌がり迫り、身体ごとぶつかりにくる。

迫り合う中で、夏侯元譲殿が上から押し付ければ私は縮み、その

逆もまた行われた。
抜けられるのは一瞬か。
そう悟った時。
「そこまでよ！」
曹孟徳殿の声が響き渡った。
「張遼。貴方の武勇。本物のようね。貴方の言葉、信じましょう」
「か、華琳様……！　私は、まだ！」
「春蘭。私は一騎打ちとは言ったわ。だけど、殺し合いをしろとは言っていない。だから止めたのよ」
「……」
あのまま行けばどちらかが刃を血に染め、どちらかが血を濡らし倒れていたであろう。
全身を駆ける疲労感と、息苦しさ。この打ち合い。時を計れば如何に短いか判るであろうが、刃を交えた者だけが判る。
長い。
その一言に尽きる。
「治療を受けなさい。春蘭」

「……はっ」

「秋蘭。私はこの男と少し話すわ」

「御意」

その言葉とともに夏侯妙才殿は数歩下がった。しかし、私を射抜く瞳に隙はない。

だが、それでも下がったのは、私をそうしても問題ないと判断しての事。

その夏侯妙才殿の私に対する評価を純粋に嬉しく思う事ができた。

武人に認められて嬉しくない方が珍しい事であろうが。

曹孟徳殿は私の元へと近づいてくる。

膝を折り、頭を垂れた。手の痺れは未だ引かず。

「貴方。張遠として、生きていく覚悟はある？」

「此度の事、曹孟徳殿に口上述べた時から、既に」

「そう。なら、言うわ。貴方、私に仕えなさい」

その言葉、有無を言わせぬ強気意志を漂わせるものであった。

しかし。

何故だろうか。その瞳には何処か諦めを滲ませる。

相対するものが曹孟徳殿の内に秘められているのではないか。

私にはそう思えてならなかった。

だが、それでも私を誘って下ったのは我が武を認めてくださったという事。

素直に嬉しく思うものである。

その喜びを出さずに。

「誠に、勝手ながら。この話。断らさせていただきたく――」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この地。未だ判らず。だが、民草の声は響き、官制は崩れ。血が大地を濡らし、弱き者が這いずり回る。これが、張文遠が実際に見た光景なのだろうか。

私には判らない。

だからだろうか。私は、私のままで。この世界で生き抜く。元の世界へ戻れずとも。

この世界で我が武を持って、この腐敗した世界を安寧と平穏最たる世界へと。

そのような大きなものを抱え込んで見たくもなった。

陳留は良い所であった。

素直にそう思えるほどの活気があり、何よりも民草の顔が良いものであった。

流石は曹孟徳殿であると感心しつつも。

私は、仕官の誘いを保留とさせてもらっていた。

あの一騎打ちの後。

「そう」

言葉はそれだけであった。

しかし、その内に秘めたものは計りしれぬものがあった。

「未だ天を知らず、地を見ず。故に、私は見なければならぬと――」

「気に入らないわ……でも。預かりましょう。暫くわね」

「はっ！」

「――いずれ。会えるわね。敵かしら。それとも」

「出来うるのならば……安寧の日々での再会を」

「ふっ。そう……そうね。その時、貴方の口から……聞く事にするわ」

「……かたじけない。寛大なお心、感謝致す」

あの器。まさに曹孟徳という名に恥じぬ代物であったな。

偽りを述べた者にも理解を示しつつも臣下への思いを巡らせる。

器は広い。それに、あの瞳だ。

何処か、我が君を思い起こす。

私はその想いを秘めつつも、旅に出た。

路銀をもらう事も馬をもらう事もせず。これ以上の恩情を私自身が許せなかったのだ。

恐らくは私の知る歴史の通りか。だが、私が居るという事。

その事実で曹孟徳殿が申した覇道の妨げになるやもしれぬ。それもまた、天のお考えなのだろうか。

そして、この現実を見るに、やはり私は世界を見る必要があることを改めて悟ったのだ。

私自身の甘さもまた。私の世界がどれほど安寧としていたのか。

戦があっても、今目の前で埋められていく名も無き者達のように死んだのならば、終わりではない生活を送ってきたのだ。

この世界、死すればそれが終焉となる。ならば、私も同じ道を辿るのだろうか。

「旅のお方。本当に有難うございました」

「礼には及ばぬ。私はただ、死者を憂いだだけの事。しかし、この地は賊徒が多い気がするのだが」

賊徒の多さは眼を見張ったのは事実。出会う度に、斬り伏せていった。

時には今のように、村を救うために我が武を奮った。

そうして、今では馬を譲りうけ、路銀を多少なりとも。

断りを入れた時の村人達の顔を見て以来、私は断る事が悪い事だと理解したのである。

彼らは心の底から、礼の意をこめていたのである。

私はその事を汲みとれず。私の心情だけでもって彼らの礼を除けやってしまう処であった。

その事を踏まえて、今となっては陳留での事で後悔をしてしまっ

ていた。

「はい。陳留周辺では賊徒が満足に動き回れないようでして、此方の方まで流れてきて、徒党を組む輩が増えております」

黄巾賊の台頭は眼に見えている。だが、未だ官軍の動きは鈍いものであった。

民草の話では反乱は起こっておらず、今はまだただの賊徒であるという認識であった。

いずれは反旗を翻し、中央の腐敗を決定的なものとして民に晒す事になる一連の騒動。

今はまだ中央からの派兵だけのようだが、諸侯に声が掛かるであろう。

私はこの地を回り、己に科せられた何かを見定めなければならぬ。

「黄色い布を纏う賊徒。最近は多くなっておらぬか？」

「えぇ……。最近はそこいらに居た賊も足並みをそろえて黄色い布を巻くようになっているようです」

「賊徒が真似をし始めたと？」

「は？　はぁ、嗚呼、確かにそうかもしれません。去年ほどから黄色い布を巻いた輩は居ましたが略奪をするような賊徒の徒党では――」

「まったく、たまったもんじゃねぇぜ！」

その怒声に反応して、私は振り返る。そこには若い男が一人。

相当に酔っているのが良く判る。酒の匂いと共に男は崩れ落ちるように座り込んだ。

「なぁ、旅のお方よ。聞いてくれよ。賊が黄巾を巻くようになってからよ。俺の愛してやまないお人達との区別が出来ない奴が増えちまったんだよ」

絡み酒ではあるが、どうやら、黄布について何かを知っているようだ。

「ほぅ。敬愛するものが黄巾を巻いているのか」

「あぁ！　あの人達は、賊なんて行為やっていないし、俺達を癒してくれる唯一無二の存在なのによ。何時の間にか、それを真似した奴らが増えやがって！　くぅ……俺はもう暫くライブを見に行っていないぜ……！」

妙なざわめきを内に感じつつも、この男の言いたい事が見えてくる。

この者達が敬愛する者が、元々、黄巾を巻いていた。そして、今賊の行いをしているのは後から、その黄巾を巻着始めたという事か。

「宗教ではないか？」

「あぁ？　宗教？　ちげぇよ。俺はアイドルのおっかけだよ」

「おっかけ？」

「あぁ。アイドルっていうのは歌って踊って見るものに幸せと癒しを振りまく崇高な役職を担う人の名称だ！！」

ふむ。やはり宗教か。なるほど。

この男が言っていたアイドルグループこそが真の黄巾賊であるようだ。

元々、張角を首魁として反乱を起こすその集団は、張角が自らを師君として太平道という宗教組織を作り、張角に仕えていたものはみな、太平道に入ったと聞く。

そして、張角は学を学ぶ際に黄色い鉢巻を巻いていた。それを皆が真似していき、形になっていったと。

ならば、こやつが真の黄巾賊徒であるようだが、ここでは少々違うようだな。

「何故、黄巾を巻く賊徒が増えたのだろうな」

「俺が、知るかよ……うっ……！！」

喋るだけ喋って、吐く男から視線を外す。

恐らくは宗教を隠れ蓑にして、略奪を繰り返す集団が居るようだ。

元々の黄巾賊の内部から分裂したのか。はたまたそのおっかけと

自称して、内部で力を持ち、緩やかに賊徒を内部に入り込ませていったのか。

方法はいくつか思いつく。それらのどれかを行ったのだろう。

この考えならば、賊徒が急激に増える理由も判る。

賊徒は本来徒党を組みたがる性質故に、そこに眼をつけた者が居るのだろう。

宗教は人が集まりやすい。その上、この宗教である教祖は管理を怠っているようにも思える。

いや、この男の言葉から考えるに宗教という形を成している事にすら……。

ともあれ、そこを巧く使われてしまったのだろう。

いずれは、諸侯の軍によって鎮圧されていくものであろうが。

「すまぬが、そのおっかけとやらに興味があるのだが。どうしてそこまでその……アイドルに拘れるのだろうか」

黄巾賊徒との区別が出来れば……。自ずと戦う兵力も判って来る。

そうなれば、早期の鎮圧もできるのではないだろうか。

まずは、調べてみる必要がある。私は判断した。

「お、アンタも見かけによらず……いいぜ。今夜は語ってやるよ…。

彼女達が如何に尊く、神々しい存在かってぇのをな！」

判断を誤ったかもしれぬ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「――というわけです」

「そう、やはり黄色い布が」

これで何度めの報告だったからしらね。

「こちらの暴徒達も同じ布を持っておりました」

立て続けにこうまで暴徒が同じ布を巻くという事。

仲間意識。共有。徒党の印。

いずれにせよ。ここ最近、急激に増加していく暴徒。加えて賊徒にも同じように黄色い布を持つ集団も増えてきている。

「桂花。そちらはどうだった？」

「はっ。面識のある諸侯に連絡を取りましたが……どこも陳留周辺と同じく、黄色い布を身に付けた暴徒、賊徒達に手を焼いているそうです」

「具体的には？」

「ここと……ここ。それから、こちらも」

偏りがあるのは仕方ないとしても、こうまで暴徒が寄り集まるかしら。

やはり、まとめる人物が居るという事のようね。

「それと、一団の首魁は張角と言うそうなのですが、正体はまったく……」

正体が掴めない？

それは、

「尋問で口を割らなかったのね」

「はっ。それもありますが」

「何？」

「捕えた賊には口を絶対に割らなかった者も居ましたが、口を割る者も多くいました。しかし、それらの答えはどれも深くはなく」

「名前以外は知らなかったと」

「はっ。後は、嘘を並べて、保身に走るものも多く。口を割らなかった者が、重要な情報を持っていたと思われます」

一団内部での統制が区分されている？

最初から口を割りそうな者には情報を絞り、今のような事態での漏洩を防いだとでも言うのかしら。

それとも、一枚岩ではなく、複数の徒党が組み合わさって。という事も考えられるわね。

「それについて、私にも思う処がございます」

「何かしら、秋蘭」

「はっ。実際、賊徒や暴徒の鎮圧ないし殲滅での事。賊徒に関しては口を割る者が圧倒的に多く。暴徒は一切口を割りません」

「確かに、暴徒の鎮圧では、蜘蛛の子を散らすように逃げていく者ばかりでも、いざ捕まえて尋問すると口を割らない。気味が悪いな」

秋蘭、春蘭。両名ともに同じような印象を持ったわけね。

武人としての感性は確かなものだものね。暴徒は決して争う事を目的としているわけではない。

そう考えられるわね。

「なるほど。賊徒は黄色い布を身につけようと他の賊徒と変わらず。違うのは暴徒のみ。ということね」

「はっ」

つまり、暴徒が急激に増えた事に便乗して、賊徒が同じように黄色い布を身につけるようになった。

規模が大きくなれば、目的意識の違いがあっても黄色い布で仲間意識を持つ。

各地で起こっている暴徒の中核が張角であったとしても……。

外を囲うのは、普通の賊徒。という事かしらね。

「これ以上に新しい情報はないの？」

「はい。今のところ、これ以上は」

「こちらもありません」

「ならば、まずは情報収集を主務とする事。張角という輩の事をどんな事でも得なければいけないわね」

その時、朝議のこの場に息を切らせた兵士が一人。入り込んでくる。

その慌て様。どのような急報かしら。

「軍議中申し訳ございません！！」

「何事だ！」

「はっ！　南東にて、黄色い布を巻いた賊徒が発生したとの事ですが！　少数の集団が合流した模様！　今までよりも大規模な軍勢となったという報告です！」

暴徒であるか賊徒であるかは行ってみなければわからないわね。

報告自体から区別をする事が難しい。徒党を組む分まだ良かったのだけれどね。

それでも、人が集まるには集まろうという意志が確かに存在するもの。

……休む暇もないうえに、今度は軍勢にまで膨れ上がったとなれば

「現在、義勇軍が村に立て篭もる準備をしている模様！」

義勇軍が居るとなればそれなりの規模……場所の検討は付く。

急がなければいけないわね。ようやく、軍令が届いたのだけれど、こちらが後手に回ってしまった。

「秋蘭。先遣を貴方に任せるわ。季衣を副官に直ぐに行って頂戴。今回の本隊は私が務めます！」

「御意」

「判りました」

ここ最近、立て続けの鎮圧、殲滅行動に疲労感は拭い去れないだろうけど、頑張ってもらわないといけない。

「桂花。すぐに後発部隊の再編を。春蘭はすぐに出られるように必要物資を直接取りに行くように。整い次第に出るわ」

「「御意」」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

難儀な事になった。ここまで素直な気持ちでそう思えた事はまず私の経験にはない。

「賊か」

「えぇ。すぐにここへ戻ってくると思います。旅のお方はすぐにここから立ち去った方が良いです」

目の前に佇む女子は、そういう。真っすぐに私を見据えるその瞳。

ふむ。楽文謙殿。か。まったく似ておらぬ。それが初対面で思った事であった。

「数は？」

「……」

「私とて武人であり、民草を護ろうとする意志を持つ者。共に戦わせては貰えぬか」

「ですが……」

楽進殿はそれでも、何処かよそ者である私を助けようとしてくれている。

その厚意は嬉しい限りではあったが、私自身その厚意に身を委ねる事を良しとはしない。

「ええやないか。凪」

「そうなの～。今は戦ってくれる人が多いに越した事は無いの」

「張遼。字は文遼と申す」

名を述べた時、ふと、黄布について情報をもたらしてくれた男の安否が気になった。

時は遡る。

私は、黄巾の男と共に、男の敬愛する3人の旅芸人を探す旅をしていた。

その三人が、真の黄巾を纏め上げる存在であると睨んでいる。故

に、身柄を確保したいと考えていた。

男も現在の黄巾を身につける賊徒に憤慨しており、確保というよりは3人から声明を出すなりして、賊徒との区別化を図ろうという事になっていた。

その道中。旅芸人が最近訪れたという村へ辿りついたのである。

「真なのか？」

「はい……。3人の旅芸人が来てから、何人かの若い衆も暴徒となってしまって……」

「ちょっと待ってくれ！　俺達は暴徒じゃねぇ！　信じてくれ。暴れだした奴らはきっと誰かに唆されただけなんだ！」

「落ち着くのだ。すまぬ。詳しく話を聞かせてもらえぬか」

「はぁ」

村人から聞いた話では、3人の旅芸人が芸を見せるために広場を貸してほしいという申し出があったという。

村長らは快諾し、広場を貸し与えると共に、旅芸人は村人に芸を見てほしいと言い、広場に集めた。

しかし、広場は既に黄色い布を巻いた集団で埋め尽くされており、芸が始まると熱気と狂気に民衆が侵されていったのだと。

芸が終わり、村人が唖然とする中、旅芸人は村を去り、暴徒達も

何処かへ消えた。

「暴徒だけならば、まだ良かったのです。彼らは暴れはしましたが、略奪を行う人々ではありませんでしたので。問題だったのは……旅芸人が去ってから来た黄色い布を巻いた集団です。奴らは略奪を行う賊徒でありました」

黄色い布を身に付けた賊徒は略奪を行っていったという。

私の目の前に広がる光景が物語っている。

「くそっ！　ここもかよ。俺達はあの人達を応援しているだけなのに……！　賊なんてやりやがるクソ野郎どもが！」

「村長。詳しくはまだ判っては居らぬが、旅芸人をこのように慕う者が芸の最中に暴徒と化していたようだが」

「はい。その通りです」

「恐らくはそのような民衆を惹きつけるその旅芸人を隠れ蓑に賊徒が真似をして黄色い布を巻いているのだろう」

「そ、そうなのですか……」

「このような、事態を一刻も速く沈めねばならないな。まずは旅芸人と会わねば」

我々がいくら口で語った所で盲信している者たちの心を動かす事は難しい。

私はそれほどの弁を持っているわけではない。

「くっ！　俺はもう我慢ならねぇ。同志を集めて、あの腐った野郎どもと俺たちを切り離す！」

「待て！　性急に動いてはもしお主らの中にも賊徒が紛れていた場合、死ぬ事になるぞ」

「そんな事、覚悟の上だ。俺は、あの人達の笑顔に、歌に。感動し、癒されて、この腐った世の中でも精いっぱい生きていこうと思えるようになったんだ。それを、それを汚されたまま見ているなんて、俺にはもうできねぇよ！」

「おい！」

それを最後に男は村を去った。

そして、その後すぐに賊徒が集まり軍団となってこの村に近づいてきているという情報を得た。

この村には義勇軍が存在しているのだが、その兵力も３００程度。加えて戦闘経験もあまり無い者ばかり。

幸いなのは将としての素質を持つ三人の娘が居たことだろうか。

「私は楽進。字は文謙と言います」

褐色の肌に輝く銀色の髪色。肌には傷から武芸を嗜む者であろうことは容易に想像がつく。

私の知る楽文謙殿は、歳に似合わず子供のように元気なお人だったのだが、まったくといっていいほど性格が逆になっている。

あの人は、誰とも気さくに話しかけ、酒の席では一芸を見せ、戦で先陣に立てないと落ち込むお人であったな。

「沙和は于禁。字は文則なの」

二振りの刀を腰に下げる女子。髪を一つに大きく纏め上げ、お下げといっただろうか。そのようにしている。

眼を惹くのは瞳の前にある透明な物体である。これはメガネという物であると私は知っているのだが。

この時代には珍しいものだろう。

これもまた、性格が正反対になっているようだ。あのお方は剛直にして融通の利かぬ人故、酒の席では良く楽文謙殿と喧嘩。もとい楽文謙殿にからかわれておったな。

「ウチは李典。字は曼成や」

訛りのある口調であるうえに、非常に肌露出が高い衣服……？衣服を纏っている。

その上に、妙に円錐形状を持つ得物を持っている。加えて腰には見慣れぬ金属の棒を皮であろう帯から下げていた。

ふむ。訛りによる違いはあるにせよ。李曼成殿は何処か学や探求についての心はあるようだ。

私の知る李曼成殿も知識欲が旺盛なお人だった故に、何処か近しいものを感じるものがあった。

「こちらの兵数は３００。敵の数は？」

「はい。恐らく２０００から３０００は居るでしょう」

兵力差は大きい。しかし、手立ては既に一手。

「陳留には既に、早馬を走らせてるの～」

援軍要請は既に、昨日の夜に走らせたようだ。つまり、一日、いや半日持たせれば援軍は来るだろう。

「防柵の設置状態は？」

既に、義勇軍が動き始めている。作業工程を知る事が先決であった。

この村は、人が多い。平地に存在するこの村は陳留などにこの村で作った作物や籠などを行商という形で売りに出ている。

商人の出入りもそれなりにあり、活気はある村であった。

曹操殿もこの村を知っているだろう。いずれはここも街となり、石造りの城壁になり、これまで以上に発展する事だろう。

故に、今の状況を打破せねばならぬだろう。

城壁は木材造りではあるが、存在している。高さも申し分はない。門は南北に通る大きな通りのみにはこれも木製の門が存在している。護りは出来るだろう。

東西には、小さな門はあるのだが、護りとなると薄い。

そこで、義勇軍はそこに防柵を設置する作業を行っていたのだ。

「大方は出来上がっています」

もう数手講じる。

「一つの門を開いた状態にしておく。家々の隙間を塞ぎ、通路に防柵を仕掛ける。敵をおびき出し、屋根上からの弓で混乱を誘い、私が打って出る。門を閉めた後、殲」

「ほんまにやれるんそれ？」

疑問の声が挙がる。本来ならば一番強固である門を一つ開けておくのは確かに危うい。

「一つの門だけだ。これでこちらに策を講じる事ができる指揮官がいると察知してもらえるのならば時間稼ぎが出来る。それに、今のは二手目。一手目は門を開けたまま私がその門前に立とう。」

「危険です！」

「そうなの～。敵さん、一杯来ちゃうの～！」

「賊は複数の集団が集まって出来た軍団だ。そうなれば、誰かが指

揮しなければならない。そこを狙う。指揮官になった者はそれなりの能力を持っている事だろう。でなければ３０００を纏め上げる指揮官に祭り上げられる訳がないからだ。故に、そういった輩は自ずと頭が回る。猪ではありえない。猪を祭り上げるほどの集団ならばそもそも集まりはしても統率など取れるわけもない。そういった猪の中でも頭の回る輩が、たった一つだけ開いた門を見てどう思うだろうか」

「……罠。を疑うと思います」

曲がりなりに頭が回る。集団には己以外に頭の回る者が居ない。

そこに己を過大評価する意識が存在してくれるのならば。僅かでも優越を持ったのならば。

「恐らく、敵はこちらを包囲するだろう。誰も逃すつもりはないはずだ。一度略奪を行っている。この村の襲う益を知った。それを確実に手に入れるための包囲。逆にいえばそれは――」

「兵力の分散に繋がるってことやな」

「うむ。そこに加えて一つの門が開けられているこの不自然。時を稼げるはずだ。万が一攻めてきたとしても、策を講じている。一旦、この策が成功したのならば、相手の動きは鈍くなるだろう。疑心暗鬼を呼び込む」

「そこまで、考えているのですか」

さらに加えるのならば、官軍が来た場合。敵将を打ち取る突撃策もある。

これは、決死になるだろう。官軍の将との掛け合いを見て決めたいのだが、間に合ってくれるだろうか。

「成功するとは限らん。故に私がその先頭に立ち、成功させる。三人は各々の持ち場を護ってくれ」

かつて、張文遠は孫仲謀率いる１０万の軍勢を僅か７０００という寡兵で護りきったという。

さらには、自ら５００を率いて敵陣を切り裂いたとも。

私はそのような男を元にして作られた張文遠。

此度の戦。勝たねば我が名が泣くというものだな。

「文謙殿！　軍勢がこっちに向かってくる！　方角から……あぁ！　官軍だ！」

義勇兵のその叫びに場は活気づく。

少数規模での先遣隊だろうが、それでも調練した兵が居ると言う事は義勇軍にとっても心強いだろう。

率いている将も曹孟徳殿の臣下だ。それに寡兵に寡兵を飛び込ませるのだ。優秀な将でなければならぬ。

「楽文謙殿は官軍の将を案内してほしい」

「は、はい！　了解です！」

「そろい次第、軍議を行おう」

その言葉を皆に伝えた刹那。

「賊軍が見えたぞ！！」

その声の轟きにこの場にいる全員に緊張が駆け抜けていった。

まず、官軍の小隊を招き入れると即座に将の元へ参る。

「曹孟徳様より、援軍の任を受けて参った。本隊もすぐに合流する」

「はい。ありがとうございます！」

楽文謙殿に案内されて、軍議の場。といっても急造ではあるが、そこに来たのは夏侯妙才殿と小さな女子であった。

「張文遼殿。久しいところだが、今はゆっくりと話し合う時間はないようだな」

「はっ。ここでの軍議でよろしいか？」

「構わない。先遣は２００の騎馬で構成されている。籠城では騎馬の特性は行かせないが、兵の調練具合は保障しよう。歩兵でも十二分に動ける者達を選りすぐっている」

「ならば、３門になるべく均等配置は如何か？。義勇軍といっても戦闘経験は未だ少ない」

「はい。出来るのならば、曹孟徳様の兵を手本に士気向上を願いたいです」

「うむ。ならば、私と季衣で８０を率いて門を護り、他は３０ずつ配置しよう」

「異論はありません」

その後、私の護る門の策を聞き、夏侯妙才殿も承諾。

軍議は早々に解散する事になった。

「では、解散！」

既に遠く彼方には敵軍が見えているのだ。

各々は即座に行動を始めていた。

「夏侯妙才殿。少しお話が」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

兵が浮足立つのが良く判る。そりゃそうだ。なんだって、門が一つだけ開いているんだ。

俺は一先ず、包囲させる事を優先させた。

血の気の多い馬鹿どもは突撃させろと喚いたが、てめぇらが祭り上げた指揮官様の言う事をきかねぇなんて都合の良い事言うやつらはぶっ殺した。

見せしめに一人殺せば、後にウダウダ言うやつも居なくなる。

俺は、こんな所で終わるタマじゃねぇ。この軍を持って俺はさらに上へのし上がる。

手始めに目の前の村を襲う。それまでは良かった。

だが、奇妙じゃねぇか。これはよう。

義勇軍が居るとは聞いていたが、どうやら将官もどきも居るようだな。

軍師が居やがるかもしれねぇ。

まずは包囲させて、あの開いている門以外を攻めさせる。

そう指示を出した。だが、万が一の可能性を残して俺は開いている門に本陣を敷いた。

偵察にでた奴によると一人の男が立っているらしい。その事が妙に気になった。

攻めてくれと言っているようなモンじゃねぇか。それはよ。

だから残した。精鋭が控えている本陣ならば数も多い１０００の軍勢だ。

他の門には５００程度の兵を当てた。時間は掛かるだろうが、義勇兵。それも出来たばかりときた。

俺達は官軍とも戦いながら奪う殺すをやってきてんだ。年季が違う。

そう思っていた。いや、今となっちゃあ、そりゃ慢心ってやつか？

えぇ。なんでこんだけ攻めて落とせねぇ！！

「か、官軍だ！　義勇兵に官軍が混じっているぞ！」

その叫びが始まりだ。馬鹿が叫んだばっかりにこっちの士気がガタ落ちだぁ。

しまいには開いている門を攻めようと俺に指図する奴まで出てきやがった。

確かにそうだ。もし策も何もなかったのなら簡単に攻め落とせる。

そろそろ部下も苛立ってきているな。

俺は、それを感じ、まずは偵察隊として城攻めには使えない騎馬を２０出した。

加えて本陣を前に出す。

何もなかったら即座に陥れるつもりだった。

だが、どうだ。偵察隊は僅か８になって逃げ帰ってきやがった。

「つ、つえぇ野郎が一人！！　あぁ……たった一人で門の前に立ってやがる！！」

あぁ。俺にも見えたぜ。一人の男が不動のまんま。立っていやがる。

強いから一人で十分ってか？んなわけあるか。

考えろ。何の策が考えられる？

――くそったれが。

「歩兵をけしかける！　３００出せ！」

俺の言葉に部下は笑みを浮かべやがった。一番乗り出来ると思っているに違いない。

それならそれでいい。後で奴らから分捕ればいい。女の方もまだ戦闘中だ。奴らも殺しあう中でヤル馬鹿は……いるかもしれねぇが、まぁ良い。

一番の目的はあの男とその背後にある策の存在を確かめる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「本気でそれを実行に移すのか」

夏侯妙才殿の瞳が我が瞳ごと貫かんが如く鋭さを増す。

「あくまで最後。しかし――」

「貴公の武は承知している。我らの兵もだ。だが、向かわせるわけにはいかない。それにだ」

そこで夏侯妙才殿は一旦を間を置いた。

「貴公は華琳様を、曹孟徳様を信じてほしい。必ず、貴公の策を講じる前に援軍は来る」

その言葉。その表情。

「これは……そうであった。すまぬ」

「貴公の思い。確かに感じ入った。他はなんとしてでも護る。貴公は貴公の場を護ってくれ」

「承知」

思えば、あの夏侯妙才殿の顔は慈愛に溢れておったと今さらなが

ら気付く。

何ゆえ、私はあそこまで気負う必要があったのだろうか。

私は、一人で全ての通りを護れると思っておったのだろうか。

なんという、慢心。なんという傲慢な思い。

私はまだまだ武人として、戦人として。未熟だ――

その思いに胸を痛めつつも気付かされた事に感謝する。

そして目の前に広がる敵軍を見据えた。

偵察に来た騎馬兵を退けた後、敵本陣は未だ動かず。我が策は一先ずのところ、成功している。

しかし、多面は奮戦空しく押し込まれているようだ。

この門に配置した義勇兵を各所に回している。正規兵はここに待機。万が一本陣が攻めてきた場合に配置している兵。

「張文遼殿！」

背後で正規兵が叫ぶ。

「これ以上は無理です！」

「門を閉めましょう！」

「ならぬ！　ここで閉めたとあっては本陣であろう１０００余りが一手に押し寄せる。小出しするのならば、まだ時は稼げる！！」

そう、小出しでくるのならば時を稼げる。

既に西の大通りは三つ目の防柵を越えられたと報告を聞いた。

東は防柵が急造だとも聞く。ならば、本隊はもうしばらくここで止まっていてもらわねばならぬ。

目の前に迫るは数百の歩兵か。

複数相手は慣れたといってもこうも数百を相手取る戦というのも難儀なものだ。

此度は戦慣れしている者達だろう。

数人殺して、散ってくれる事も薄いか。

「おうおぅ！　一人で凄いねぇ！！」

だが、数百という人数。その集団を指揮する者が居らぬ事が私にとっての僥倖。

「ハハッ！！」

下劣な笑みを浮かべた者の集団。

集団故の益に浸る者達。

「何用か。ここはお前たちのような畜生以下が来るべき所ではないのだが」

集団に心を縛られた者達よ。己が今、対峙する私を何と思うているだろうか。

「ハッ！　吠えやがんな！！」

我が武。未だ高みを望めず。我が道。未だ判らず。

故に、彷徨う私には、今。目の前にいるお前たちに討ち取られる訳にはいかぬ故。

「たった一人で何ができんだよ！！」

我が武を持って、戦人の道へ往かん。

何人もこの先、通す訳にいかん。

「お前達の心に我が名を刻め！　我が名、張文遠！　我が武をもってお前達を成敗致す！！」

勢いで真の方を名乗ってしまったが、もう遅い。

押し通す。流れるままに！

いざ――参る！！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一体――なぁ。おい。何の冗談だよ。おい。

「３００だぞ……。３００。３００向かわせてよぅ。何で男一人討ち取れねぇんだよ！！」

なんだよ！　あいつは！！　化け物か！！

くそったれ。３００向かわせて死んだ奴らは数十名ってところ……。それだけでも十分馬鹿強い事が判る。

加えて、その化け物と対峙した残りの２００数名は敗走しやがった。

奴らはもう使いもんにならねぇ。逃げた奴がまた同じ奴に挑めるわけがねぇからな。

それにこっちも直に見ちまっている。本陣に居る奴らの空気が悪い。

怯えてやがる。当たり前だ。目の前で化け物と人様の喧嘩みたんだからよ！！

くそ……。

どうする。このままだと無駄に兵を失うだけだ。

だが、どうだ。今の戦闘で士気はがた落ちだ。

まだ別門から攻めている奴らのほうが士気が高い。

ちっ！

「この門から攻めない。異論はあるか。ここに５００を残して残りの２００は別門落とせ」

５００。最低限を残す。俺が残れば、奴らも少しは安心するだろう。

救いはあの男が攻めてこない事。そりゃそうだ。

あいつには兵がいねぇ。それに包囲されている別のところも気になるんだろう。

だったら、他に兵を割いて、最低限の兵員であの男をあそこから動かさねぇ。

「報告！　東は最後の防柵まで侵攻！　西も残すは二つ！」

よっしゃ。吉報じゃねぇか。

「兵に伝えろ！　その二点を重点に攻めろとな！」

随分と粘られたが、よしとしようじゃねぇか。

少数の官軍も混じっていたそうだしよう――あぁ？

そうだ……官軍。官軍だぁ？

「おい。官軍が居たって報告は確かだったのか？」

「えっ？あ、はい。少数で義勇軍とほぼ大差ない数のようですが」

「おぅ。そうか……一気に落とせ！　全軍を東に向けろ！！」

馬鹿が……！

目の前の男に固執しすぎた！！

何で、最初の報告の時に俺は考えなかった。

何故、ここに官軍が駐留していた。

そりゃ、補給とかなんとかあるかもしれねぇが。

まず疑うは先遣！

くそったれが！！

速いところ攻め落として逃げねぇと拙い。ここでやたらと兵を失っちまっては俺の立場もねぇからな。

「ほ、報告します！！」

「あぁ！　なんだ！　打ち破ったか！」

「そ、それが……！！」

「か、か、官軍だ！！　官軍の大軍が来たぞ！！」

「曹操だ！　陳留の曹操の旗だ！！」

最悪たぁ。この事だぜ――

未完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9748m/

真・恋姫†無双＜遼来来。外史へ＞

2011年10月6日15時54分発行